

e-learning と連携し、学びでも活用するデジタルアーカイブのメタデータの考察

齋藤陽子、横山隆光、櫛彩見、加治工尚子、久世均、大木佐智子（岐阜女子大学）

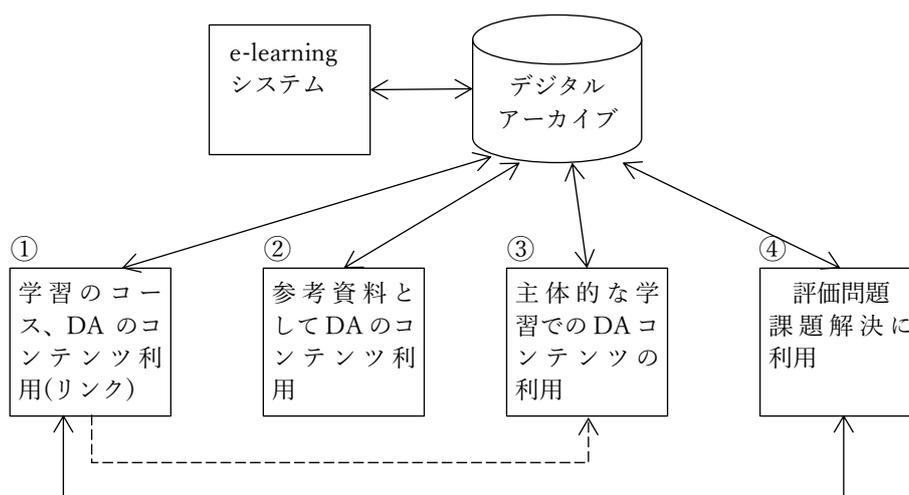
e-learning が広く活用されだし、その学修での活用方法も多様化されだした。とくに、e-learning の学びの環境としての欠点として学習者の近くに関連資料がないことである。

1. e-learning を用いた学修でのデジタルアーカイブの活用例

例えば、大学では図書館、資料室等で必要な資料を調べ活用できる。ところが自宅等で e-learning で学修する場合に、

- ① e-learning の学びの中で参考資料として活用
- ② e-learning の学習コンテンツとしてリンクし利用
- ③ e-learning を用いた主体的な学びで活用(アクティブラーニング)
- ④ e-learning の評価問題、課題としての利用

などがある。



また、e-learning の教材構成として、

① 討論形式

何人かの教員等で話し合い(討論)の状況で必要に応じてデジタルアーカイブの資料を参考として利用する。

② 2人の対談方式(講師と補助者)

主な講師とそれを支援する教員で講師が講義をして、それに対して教員(サブ)が質問等をし、講師が説明するときの参考資料としてデジタルアーカイブのコンテンツを利用する。

③ニュースキャスター方式

ニュースキャスター方式では、話しに対応し各種の資料が利用される。(デジタルアーカイブのコンテンツをリンク情報で利用)

など、e-learning の学びの欠点を補助する方法がなされてきた。

2000 年の衛星放送等とテレビ会議を用いた遠隔教育では、デジタルアーカイブではなく、資料集を作成し学習者に提供していた。これらが e-learning と結びつけられたデジタルアーカイブで可能になり、より豊かな学習環境が整備できるようになってきた。

2. e-learning と連携するデジタルアーカイブのメタデータ

e-learning とリンクさせたり、学習者の学修で必要なコンテンツを検索し利用できるデジタルアーカイブでは、そのメタデータの構成が重要な事項となる。

メタデータの記録の基本的な構成としては、他のデジタルアーカイブと同様に管理番号と 4W1R である。

ID(管理番号、重ならないように)

What(なに)：教材・学習材の表題や内容説明、分類、索引語等

Who(だれ)：人物、氏名(著作名、作者名など)、所属等

Where(どこ)：場所(コンテンツの場所：保管場所も含め)

When(いつ)：時期(e-learning の学修として、学年等も含む)

この他に、Right：著作権、プライバシー等の利用条件、権利についての許認可が重要である。

これらの他に学びとして、コンテンツの特色、利活用の支援、注意などの情報も重要となる。また、学びの結果からコンテンツの改善のための情報、例えば還元情報(なぜ、どのように改善するか)、これらを支える PDCA サイクル情報も大切な情報となる。すなわち、5W1H1R の観点での構成であろう。

このような観点で 2016 年から開発試行を進めてきたメタデータの記録項目として、次のような項目を設定している。

4 W1R に運用上の項目を追加した (基本的なメタデータ項目)

ID	表題名	資料名	内容分類
索引語	説明	形式	氏名
時代・年	地域・場所	利用条件	関連資料 1
権利者	協力者	登録日	登録者

教育的利活用に配慮した項目

ファクトデータ	特色	活用支援	利用分野
改善結果	処理プロセス	関連資料 2	その他

今後、これらに更に何が必要か検討し、e-learning でより有効な活用が可能になるように検討を進めている。